

## ◆ ニュースレター おおば ◆

平成28年12月号

## テーマ『日本はなぜ、「戦争ができる国」になったのか』

○：矢部宏治著、「日本はなぜ、「戦争ができる国」になったのか」、集英社インターナショナル刊を読んだ。前著、「日本はなぜ、「基地」と「原発」を止められないのか」、がかなりインパクトのある内容だったので、興味を持って読み始めたが、期待を裏切らない中身だ。

○：新聞に「核の密約」などの記事が出ることもあるが、昔、そんなことがあったのか、かなりの印象で、なかなかその重要性に気づかないことが多い。また、外交の交渉の過程では表に出せない話もあるだろう、くらいの感想で済ませることもある。しかし、それらをしつかり見極め、理解しないと、その後、あるいは現在に、大変な影響を与えていることを本書は気づかせてくれる。

○：日本はアメリカの属国か、と言われることがある。本書にある「基地権密約」と「指揮権密約」を読むと、属国という表現への抵抗

はあるが、それに近い状況にあることは否めない。米軍が日本の基地を自由につかうための密約「基地権密約」は既に完成されており、米軍が日本の軍隊を自由につかうための密約「指揮権密約」が昨年の安保関連法で大きく完成に近づいた、と私は感じている。国連軍を核とした安全保障とか、憲法の理念とか、大戦後の平和構築をマッカーサーも目指したのだろうが、朝鮮戦争勃発が全てを変えてしまい、日本は今もその混乱から抜け出せないでいる、と感じる。

○：団塊の世代の一人として自分が生まれ育った時代が、こんなにも戦後処理で混乱していた時代だったとはつゆ知らず、ノホホンとこの歳まで過ごしてきたことは気恥ずかしい。大学に入った時も、学生運動のど真ん中の環境なのに全く関心が持てず、クラスにアジ演説に来ていたのに耳も貸さず、

機動隊とゲバ棒のデモ隊との衝突を目の当たりにしながらも、他人事だった。学生運動に加わるかどうかはともかく、何が問題なのか、自分はどう考えるのか、向き合わなかったのは未熟だった。社会とか政治とかに目を向け始めたのは美幌に戻ってからだ。

○：国を守る、ということについて考えているのだが、一向に考えがまとまらない。憲法、自衛隊、安全保障、日米同盟、対中対韓アジア問題、北方領土等々。戦後は全く終わっていない。と言うより日本は独立を果たしていない、とさえ言える。だけどころちんと独立を果たすことは可能だ。本書では「独立のモデル」として①憲法改正によって米軍を完全撤退させた「フィリピンモデル」②東西統一とEUの拡大によって国家主権を回復した「ドイツモデル」、を例示している。どちらがいい、ではなく、やりようはある、ということ

だ。憲法についても、いろいろやりようはある、ということだ。「自分たちには政治についての自己決定権がある。自分たちの好きな国のかたちを、自分たちで決める権利がある」という矢部氏の言葉に元氣付けられる。

○：2016年も残りわずか。本稿を読んでくださったお礼を申し上げます、明年のご多幸をお祈り申し上げます。